

01 interview

栃木県立
真岡北陵高等学校

生涯学び続ける人材を育成 その意欲を大切にしたい

少子化や定員割れなどを理由に、県立高校再編計画案で介護福祉科の廃止案も出されたが、地元関係者の反対が相次ぎ、撤回された栃木県立真岡北陵高校。地域で活躍する福祉の専門職などの外部講師を招いての講義や、生徒が中心となって行う市役所での福祉イベントなど、地域に貢献する福祉教育を実践している。

外部講師を学校に招き 現場の介護を体感させる

本校では、1995年から介護福祉士を養成してきました。地域からの期待も高く、毎年多くの求人があります。介護福祉科は1クラス(定員30人)ですが、多いときは9割が地元をはじめとする県内に就職。卒業生の多くが高齢者介護に携わっています。

本校の介護福祉科では、ほとんどの生徒が介護福祉士の資格を取得して卒業しますが、国家試験を目標に設定すると予備校のようにになってしまうので、教科書で学んだことを自分の生活に置き換えたり、相手の立

場になって考えられるようになることをめざしています。

そのために行っていることの一つが、地域の介護・福祉に関わる専門職の方に講義してもらう「外部講師講話」です。地域包括支援センターをはじめ、介護事業者、元介護職のラジオパーソナリティなどさまざまな方に依頼し、年に6回ほど実施。介護・福祉の現場を体験している方のお話は教科書で学ぶより身近に感じられ、生徒の理解も深まります。多職種協働やコミュニケーション技術も自然と学ぶことができ、大変刺激を受けるようです。生徒たちが自分から質問する姿を見て、教員にとっても良い刺激になっています。

最近では、生徒の実習先で外国人介護人材が働いているケースが増えました。就職先でも外国籍の方と一緒に働く機会も増えると思うので、

昨年から外国人介護人材が多く働く特養との交流会を開始。今年は、本校で一緒に着脱介助の研修を行いました。初めのうちは言葉が通じないと思っただけでなかなか会話が弾みませんが、交流を続けていくうちに誰にとってもわかりやすい日本語なら外国の方にも伝わり、ひいては利用者にも伝わりやすいことを学んでいます。

生徒が企画・実施する 福祉イベントを開催

本校は栃木県の東部にあります

が、近隣市町村においても人材不足など介護を取り巻く環境や悩みは同じです。そこで昨年8月、本校を中心に「芳賀地区福祉教育連絡協議会」を立ち上げました。会員は、市町の行政や社会福祉協議会、介護事業者、郡市医師会、J A、県の老協協や老健協、介護福祉士会など57団体。これまで一堂に会する場がなかったため、同じ業種間では情報交換ができていても、業種を越えたつながりは足りていませんでした。今後は、福祉教育の拠点である本校に集い、より良い福祉教育や福祉人材の確保について、一緒に考えていきたいと思っています。

昨年の夏休みには、福祉のイメー

ジアップを図るために「市役所 de フクシ」という福祉体験イベントを開催しました。市役所の建物が新しくなり、1階の健康福祉部の窓口の前がオープンスペースになっているので、生徒たちから「あの場所で行ったイベントをやってみよう」という話が出て、ダメ元で市に交渉したところ、快く受けられました。

栃木県立真岡北陵高等学校
介護福祉科長

柳 路子
Michiko Yanagi



栃木県立真岡北陵高等学校

● 栃木県真岡市下籠谷 06
www.tochigi-edu.ed.jp/nokahokuyou/nc3/1908年、芳賀郡立農林学校として開校。その後、栃木県立真岡農業高等学校に校名変更し、1995年、現校名に改称。農業系3学科に、商業系1学科、福祉系1学科(介護福祉科)が加わり、総合選択制専門高校となった。2024年3月末でトータル843人の卒業生を地域に送り出している。

福祉体験というと公民館や保健センターなどで行うイメージが強いと思いますが、オープンな市役所のスロープや点字ブロックなどを使用して、車椅子体験や点字体験などを実施。何を体験してもらうかは、生徒たちに考えさせました。市役所の2階には子どもたちの勉強スペースがあり、おかげで小学生から大学生親子連れや孫連れなど幅広い世代の方が参加し、本校のPRにもなっていると思います。

高校で福祉を学ぶ生徒は 非常に高い意欲をもっている

本校では、夏休みに1日体験学習という学校案内の機会があり、多くの学生が介護福祉科を見学に来てくれます。子どもにも介護福祉士の資格を取らせたいと思ってくれる家庭も多いですが、一方で、福祉に対して否定的な考えをもつ家庭も、まだまだ多いと感じています。

「介護の仕事は大変、給料が安い」という面ばかり取り上げられてしまうことが多いからだと思いますが、介護福祉士の資格をもって正規職員として働くのであれば、給料は決して安いわけではないと思います。そ



医療的ケアの一環として喀痰吸引実習を行う



市役所 de フクシのイベントで子どもたちが車いすを体験

の点は、面談などの際に親御さんにはよく説明するようにしています。介護福祉科の生徒が実習に行ったとき、実習先の職員が明確なビジョンをもち、やりがいをもって働いていると、「自分もあのようになりたい」「ぜひここで働きたい」と感じます。職員が自分の仕事に誇りをもって働いている職場は魅力的ですし、ひいては介護業界全体の魅力につながるはず。

学生を介護現場に送り出す側としては、必要な知識や技術の習得はもちろん、就職しても自分のスキルアップをめざし、自分の成長のために仕事をしていける人材に育ててい

きたいと考えています。専門職は資格を取って終わりではなく、いかに自分の知識や技術をアップデートできるかが大切。生涯学ぶ姿勢をもつことをしっかり教えていきたいと思っています。

高校で福祉を専門に学び、卒業後すぐに働きたいと考える生徒は、非常に高い意欲をもっています。介護事業者には、その意欲を大切に育ててほしいと思います。研修制度やメンタル面のフォローなど、前向きに働き続けられる環境づくりをぜひお願いしたいです。職員がいきいきと働いていれば、利用者もその家族も、安心して生活できるはず。